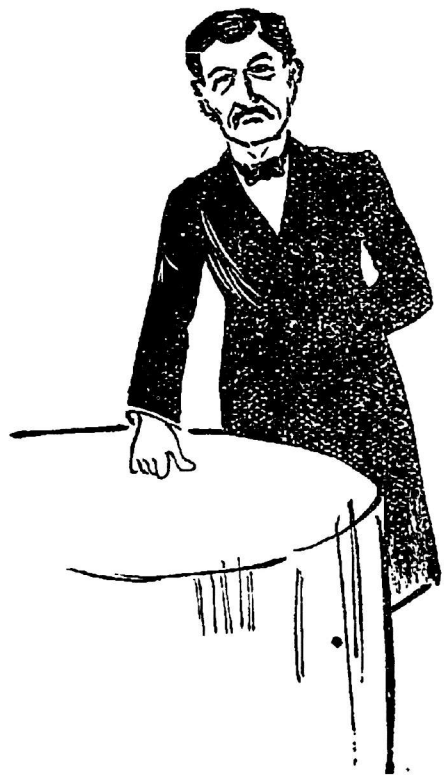
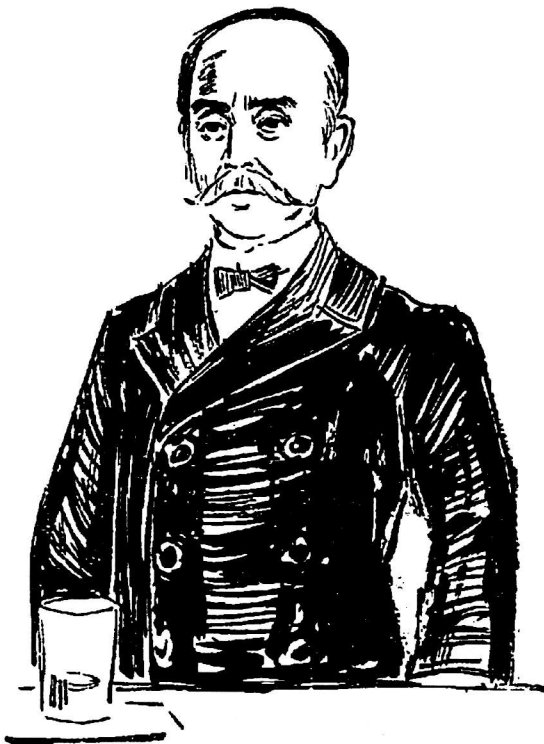


沼津市

# 明治史料館通信

2006.4.25 (季刊 年4回発行) Vol. 22 No. 1 通巻第85号



『現代名士の演説振』(明治41年刊)に掲載された江原素六・島田三郎の挿絵

江原素六とその周辺(40)

## 江原素六の

### 演説ぶり

沼津兵学校資業生出身の政治家島田三郎は、サブロウではなくシヤベロウだとまで言われたことく、雄弁家として知られたが、そのあまりの早口から「速記者泣かせの随一」でもあった。一方、島田の恩師・先輩にあたる江原素六も演説を得意としたが、プロの速記者からは以下に引用するような好い評判を得ている。

▲氏の演説速記者に謳歌されるものがあるまい。純粹の江戸弁で、首尾明瞭に聴え、声に幅があつて、速力も左程早くなく、ゆつくりして居るから、是程速記好い事はない。音に速記者許りでなく、聴衆に取つても、氏の弁舌程聴取好いのは尠からう。それに大抵の人は、其弁舌が政治方面に向くかと思へば、文学又は宗教其他の方面に不向きであるし、文学の講話又は説教などに向くものは、

兎角政治演説には不向きのもだが、氏の弁舌は是等の何れへも向くから重宝だ。

▲政治演説をさせても、頗る穩健雄渾で、誠に堂々たるものた。説教をさせても、純然たる牧師の風があつて、背こそ余り高くはないが、白髯を撫して、謹厳正直の態度で、講壇に立たるゝ時は、何うしても霊界の人としか見えない。漫ろに青年の師父として、崇高敬虔の念を起さしむるのである。其他文学上の講話、教育上の話説一として可ならざるはなく、目今の弁論界に於て、氏程融通の利く人は先づ他にあるまい。

▲氏が各方面に於ける演説講話は、いつも其豊富なる自家の経歴談より説起さるゝから、誠に興味深の津々たるものがある。然も其口調が、真摯直截の中に滑稽を交へらるゝから、一種言ふべからざる妙味がある。(後略)(小野田亮正『現代名士の演説振』、一九〇八年、博文館)

江原素六の話し方は、島田三郎とは違い、ゆっくりで聞き取りやすいと好評だったのである。この

書籍では、他に、江原の口癖として「然し」「併しながら」「苟も」が多く出ること、七・八年前までは吃することもあつたが現在では克服していること、断ることなくできるだけ講演依頼に応じようとする謙虚な姿勢、校務をこなしながら各地の講演会を飛び回る多忙ぶり、華々しく激しいわけではないが着実・真摯な弁舌には確かな感化力があることなどが指摘され、大いに誉めている。

また、江原の持論が、見ず知らずの西洋のことなどよりも、日本のこと、それも自身が直接見聞きした事柄を素材に講話を組み立てている点にも注目している。江原曰く、「人は自分程能く知つて居る事はないから、高慢にならぬやう、矜らず飾らずに、露骨に有りの俣自分の事を話すのが一番だ」。

江原が残した資料には、罫紙に墨書された多数の演説草稿がある。没後に刊行された『江原素六先生伝』(一九三三年)にも講演録が三編ほど収録されたが、「半生は講演を以つて終始したるの観」がある江原にとって、それはたまたま

記録化されたほんの一部にすぎない。『江原伝』にも、「滔々水の流るゝ如きにあらねど、その語る所は童幼婦女と雖も解するを得、然かも一種の力の言々に籠るを見る」などと、江原の演説評が載る。

ところで、右の引用文にも「純粹の江戸弁」であつたとあるが、谷崎潤一郎も以下のような思い出を書き残している。

(前略)嘗て東京の府立第一中学に在学の時分、或る年学校の記念日に、当時麻布中学の校長をしてをられた故江原素六翁が来賓として出席され、講堂で講話をされたことがあつた。私は翁が維新の豪傑の一人であり、

當時も有名な政客であり、高潔な人格者であることを聞いてゐたから、子供にありがちな英雄崇拜の心持を以て翁の演説に耳を傾けたが、意外にもその言葉づかひは自分の学校の校長や教師の「のである口調」でなく、

実にキビキビした江戸弁であつた。「おらア知らねえ」とか、「仕方かねえ」とか、翁はさう云ふ言葉をさへ交へた。人も知る通

り、江原翁は徳川氏の遺臣であり、生粋の江戸文化の中に育つた人であるから、演説にもその持ち味が出ずにはゐなかつたのであらう。徳川の末期になると、旗本の武士も市井の町人と殆ど変わらないサバけた口調を使つたもので、翁の言葉を聞いてみると全く私の親父なぞの話しぶりと同じであつた。私は後にも先にも、こんな気持のいゝ、カバリとした演説を聞いたことはなかつた。少しも袷を着けてゐないで、翁の颯爽たる人格が言外に溢れてゐた。勝海譜翁などの話しぶりも恐らくさうではなかつたであらうか。(後略)

(谷崎潤一郎『現代口語文の欠点について』『改造』昭和四年一月号、『谷崎潤一郎全集』第二十卷、一九八二年、中央公論社、所収)

谷崎は、武家の出である江原が、その飾らない人柄とともに、市井の町人と変わらない、江戸っ子のサバけた口調を使っていることに大いに感銘を受けたようである。

(樋口雄彦)

シリーズ  
沼津兵学校とその人材

76

## 第九期資業生 真坂 忍

沼津兵学校資業生の最終、第九期生に真坂忍という人物がいた。

明治二十七年（一八九四）の沼津兵学校記念碑建設の賛成員になっていくほか、静岡育英会・同方会・葵会といった旧幕臣の親睦団体の会員となり晩年に至るまで旧交を温めていた事実がある。

石橋純彦「沼津兵学校沿革（五）」『同方会誌』42、大正五年）には、「真坂忍 旧名新十郎、六年八月陸軍兵学寮馬学生徒に入り翌年伍長、十四年騎兵曹長、満期除隊の後、綿糸機械の販売に失敗し更に陸地測量部に入り諸方測量日清日露の戦役の功に依て正六位勲五等に叙せられ四十三年職を罷め下渋谷に隠棲して弓を弄して老を養ふ



真坂忍 明治40年8月4日撮影  
(真坂洋氏提供)

と略歴が紹介されている。

これには旧幕時代の履歴がないが、慶応四年の「駿河表召連候家来姓名」（静岡移住予定徳川家臣団者名簿）に記載された「真坂新十郎」が彼のことであるとすれば、小筒組嚮導役（下士官）だった。

資業生に及第してわずか一か月後、明治五年（一八七二）五月、沼津兵学校（沼津出張兵学寮）は廃校となり、資業生は東京の陸軍教導団に編入された。真坂の名は、編入者六三人の中にない。年少者は編入から洩れたというが、当時一九歳になっていたはずの真坂には何か別の理由があったのだろう。しかし、他の多くの同窓生たちと同様、結局上京し陸軍に入ることになる。六年（一八七三）八月陸軍兵学寮第二舎（馬医生徒・馬学生徒を教育する機関）に入学した。彼は、馬医生徒ではなく馬学生徒のほうになったが、それは調馬師（馬を調教し乗りならず専門家）

の養成コースであろう。

彼の名前が登場する当時の陸軍の公文書には、以下のものがある。

## ①第七十四号

当寮馬学生徒真坂忍江相渡有之候長香及拍車紛失之趣、本人より別紙之通届出候間、此段御届申候也

明治七年一月十四日

兵学頭曾我祐準代理

兵学助保科正敬

山県卿殿

別紙略之

## ②第四百二十二号

一長靴 壹足

一拍車 壹足

右者本月十三日御届申置候当寮第二舎馬学生徒真坂忍へ御渡有之候分紛失二付、日々ノ伝習ニ差支不少候間、前書之二品至急臨時御渡方相成候様致度、此段相伺候也

明治七年一月廿日

兵学頭曾我祐準

山県卿殿

何之通 一月廿五日

（防衛庁防衛研究所蔵「大日記

諸寮司伺届并諸達 一月金 陸軍

第一局）

後年日本軍には「員数合わせ」

という言葉があったように、軍隊での官給品の数は絶対であり、その紛失は大きな落ち度とされた。

右の文書以外にも、教導団騎兵第一大隊附・伍長になっていた翌八年一月軍馬局馬匹名簿を紛失し、九年一月に禁錮一〇日の判決を裁判所から言い渡されたという記録もあり、『近代史史料 陸軍省日誌』第四卷、東京堂出版、一三二頁）、なぜかミスが続いた。

除隊後は一時商業に従事したが、明治十五年（一八八二）時点では陸軍參謀本部の陸地測量部に入り、地図作りに携わっていた。具体的には、一三年から一九年（一八八六）にかけて作成された第一軍管地方二万分一迅速測図原図の作成であり、測量課雇・副手・測手代理・測手心得などとして実際に彼が作図した地図には、神奈川・千葉・茨城県下の一〇枚がある。准判任御用掛、判任官・八等技手としてその後も勤続した（『明治前期手書彩色関東実測図 資料編』）。

昭和六年（一九三一）三月一三日、七八歳で没。東京谷中の菩提寺に眠る。（樋口雄彦）

お知らせ欄

◎西周レリーフが沼津市に寄付されました

去る3月19日(日)、沼津香陵ライオンズクラブが30周年記念事業のひとつとして、沼津兵学校頭取西周のレリーフを制作し、沼津市に寄付しました。レリーフはブロンズ製で、彫刻家下山昇氏の制作です。現在、当館4階沼津兵学校コーナーで展示しています。将来は西周が沼津で居住していた片端19番地の近辺(現あまねガード南側の辺り)に設置される予定です。当館所蔵の幕府オランダ留学生として渡欧した際の西周をモデルに制作され、ちょんまげ頭ではない洋装の西周は、新しい時代の到来を感じさせます。



◎平成17年度受贈資料(受贈順)

井口省吾書額など(第四小学校)

様、野沢房迪関係資料(野澤敦様)、消防喇叭(原貞夫様)、加藤定吉関係資料(山本美穂子様)、絵葉書(松尾茂雄様)、陶製ボタン・GHQ検閲済封筒など戦時資料(水野秀和様)、山口知重関係資料(山口渚様)、兵士記念写真(工藤輝久様)、灯火管制用電球等(八十濱俊一様)、乙骨太郎乙宛葉書(寺岡襄様)、中根香亭関係資料(西村正雄様)、奉公袋など戦時資料(村松妙子様)

◎平成17年度受託資料

旧幕臣池谷家文書(池谷忠俊様)

◎平成17年度館蔵資料の展示等貸出・提供(順不同・敬称略)

芹沢光治良文学館・「我等は海と松風育ち」田村茂・写真展(赤坂沼津学園の疎開生活を振り返る)・写真パネル、藤枝市郷土博物館・「田中城と城下町」沼津城周辺図、沼津文学祭実行委員会・「井上靖と沼津 夏は夏草、冬は冬涛」大正期絵葉書、西武百貨店・「沼津のあゆみ写真パネル展」・写真パネル、同店・「なつかしの昭和の思い出写真展」沼津市街地写真(昭和38年頃)、沼津市歴史民俗資料館・「3市共同企画展 こどもの風景」教育のいま・むかし」沼津兵学校の授業風景模型・小学沼津学校写真・戦後小学校の教科書等、同館・「はかるく尺・升・貫からm・l・kgへ」展・度量衡器其他書類(金岡村役場文書)等

◎平成17年度館蔵資料の出版物、テレビ等への写真・資料提供(順不同・敬称略)

SBSテレビ・「静岡発そこ知り」沼津仲見世商店街の移り変り・仲見世通り写真、天野清文・MBC学園内「古文書の読み方講座」、天野出版工房『はじめての古文書教室』御奉公人請状之事(原渡辺本陣文書)、桜ヶ丘ミュージアム・終戦60周年企画「豊川海軍工廠 巨大兵器工場―終戦60年後の記録」展・沼津海軍工廠跡地写真等、佐藤哲寿・『ミラー夫人と三浦徹による「喜の音」』・「小さき音」、静岡放送・「終戦60周年企画」・戦時資料、吉川弘文館・樋口雄彦著『旧幕臣の明治維新』沼津兵学校関係資料、不二出版・『近代日本「平和運動」資料集成』大日本平和協会刊行書籍(江原素六関係文書)、フジテレビ・「トリビアの泉」・渡瀬庄三郎写真(大野寛孝氏提供)、北海道放送・「超歴史ミステリー」龍馬の黒幕」西周写真(幕府オランダ留学生写真)、雅心苑・栞・富士を背景とせる沼津三島、東京書籍・「ビジュアルワイド社会科資料集 6年別冊 静岡県版資料」沼津大空襲後の復興の様子写真、海老原一彦・静岡県立図書館貴重書講座「葵文庫と貴重書に見る日本近代化への模索」幕府オランダ留学生写真、静岡第一テレビ・「プラス1しずおか」片倉蚕種工場解体・沼津南市場写真、沼津市歴史民俗資料館「資料館だより」馬力を曳いている風景(沼津駅前)写真

◎館職員の人事異動について

3月31日付で館長名倉忠興が退職、後任に4月1日付で阿部直樹(管財課課長)が着任しました。

沼津市明治史料館通信 第85号

編集 沼津市明治史料館 発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七一―一  
電話 〇五五―九二二―三三三三  
FAX 〇五五―九二二―三〇一八  
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kwashi/sisetu/meiji/index.htm